

まえがき

西暦二〇〇七年（平成十九年）はジョージ・ギッシングの生誕百五十年目にあたる。本書は、その記念事業として、編者がヴィクトリア朝研究の文字どおり第一線で活躍されている国内外の二十四名に声をかけ、今までの著書や論文に従って最も得意とされるテーマの章を割り当て、ギッシングを通して見た「後期ヴィクトリア朝」の社会と文化について論じてもらった成果である。

本書における編者の主たる目的は、ギッシングの作品を二十五年のテーマ別に読み解くことによつて、彼が生きた後期ヴィクトリア朝の時代精神と社会思潮を複合的に捉え直し、新たな全体像を構築することにある。ギッシングは、自然科学の発達や科学技術の発明がもたらした新しい価値観の影響下で変貌する当時の社会と文化を冷徹な眼差しで観察し、そうした変化にもかかわらず大半の人々の改善されない、むしろ悪化している内面世界の真相を読者に提示している。教養を武器として、時には社会的な諸問題を自然主義的なりアリズムの立場で赤裸々に描いてみせ、時には主要人物たちが事大主義に陥つて無意識的に犯している様々な罪を諷刺してみせるギッシングの文学は、上記の編集目的にかなった資料を豊富に供給してくれる。そして、このような目的で今回の出版を企画するにあたって、編者

には固い信念があつた。それは、本書が後期ヴィクトリア朝と極めて似た状況にある現代の日本社会に内在する諸問題を読者に直視させ、その解決の糸口を見出すのに示唆的で意義のある見解を示してくれるはずだという信念である。

ロンドンで第一回万国博覧会が開催された一八五一年から、新興国のドイツとアメリカの工業化によつて大不況が始まる七年までは、「中期ヴィクトリア朝」と呼ばれている。それは、イギリスが産業革命後の鉄道・汽船による交通革命を経て、「世界の工場」として経済と金融をグローバルに牛耳つた大好況期である。一八七三年から始まるイギリスの慢性的不況は九六年まで続いたが、この大不況の到来から一九〇二年にポーア戦争が終結する直前までの後期ヴィクトリア朝は、文学青年ギッシングが習作を残した学生時代から、異郷のピレネー山麓の村にて四十六歳で亡くなつた一九〇三年までの創作活動の時期とほぼ一致している。

歴史研究者の村岡健次氏は、一九八〇年に上梓された著書『ヴィクトリア時代の政治と社会』の冒頭で、後期ヴィクトリア朝に関しては「一八七〇年以前について与えられていたほどの明快なイギリス史像が打ち出されていたかとなると、これは疑問というほかはあるまい。（中略）また一八七〇年代以前における歴史との関連性も十分に問われたことがあるとはいいたい」と述べている。しかし、その後の四半世紀の間に、後期ヴィクトリア朝研究は歴史学のみならず様々な学問分野でも大

いに進展した。出版物の量に関するかぎりは一八七〇年以前のヴィクトリア朝研究を凌駕している。このように過去四半世紀の間に後期ヴィクトリア朝への関心が急に高まったのはなぜであろうか。科学技術の長足の進歩が生活の便を格段に向上させたはずなのに、人間をかえって多忙にして疎外感を抱かせているという皮肉なパラドックスの点で、十九世紀の最後の四半世紀と二十世紀末を跨いだ過去四半世紀の状況が酷似していることに、その最大の理由があるように編者には思えてならない。

ギッシングが科学に反感を抱いたのは、随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）で言っているように、「科学が半永久的に人類の残忍な敵となり、人生の一切の素朴さや優しさ、世界のあらゆる美を破壊する」（『冬』第十八章）という悲観的な思いがあったからである。そのような思いは百年以上が経過した二十一世紀の現在を生きる私たちの心の中にもあはずだ。電気通信、タイプライター、万国郵便、自転車、地下鉄、蒸気船などによって日常生活が高速化した後期ヴィクトリア朝と同じように、インターネットの登場で急激に情報化と国際化が進んだ現代においても、人々は価値観や人生観の多様化によって漠然とした不安感や閉塞感を覚えている。華やかな最新の科学技術の裏面には必ず負の遺産が伏在しているのだ。最大の問題は、功罪が相半ばするものであっても、その功績が強調されるあまり、罪過が隠蔽されてしまうことである。これは決して科学技術だけの問題ではなく、本書で取り上げられて

いる教育や宗教をはじめとする様々な領域の問題でもある。新しいものに関する常軌を逸した競争という近代および現代の人々の強迫観念は、新しいものに内在する功罪によって多種多様な問題を生じさせてきた。このように新しいものをめぐって人間社会が経験してきた流動・変遷の姿を記述することもまた、歴史学の仕事だと言えるのではあるまいか。

二十世紀初頭までの歴史学は政治・経済の史料に対する実証主義的な研究に偏っていた。しかし、過去の人間生活の諸事象を研究する学問であるはずの歴史学は、名もなき民衆の心性にまで深く切り込んで考察するために、人間の日常生活や風俗習慣を具体的に捉える社会史や文化史をも重視するようになった。一方、文学批評は文学作品を作家自身の思想や感情が表現されたものとしてだけでなく、社会や文化の諸相が言葉によってテキスト内部に再現されたものとしても捉え、作品を取り巻く社会とその様々な文化現象に多くの関心を払うようになった。その意味において、歴史学と文学批評は隣接領域だと言えるし、より高度な研究を進めるべく互いの研究資源を活用し、相互補完することは極めて重要である。教育、宗教、階級、貧困、都市をはじめ、本書の目次に見られるような数多くのテーマを内包するギッシングの作品、そして彼の作家としての内面を示す膨大な書簡や日記は、後期ヴィクトリア朝の社会と文化を考察する上で、第一級の歴史資料だと言ってよい。このような文学資料の分析によって、歴史学やその他の分野で提示され

ている言説の傍証を固め、今まで見えなかった後期ヴィクトリア朝の時代精神や社会思潮の位相を照射し、新たな全体像を構築するという方針で、本書は編纂された。そのような方向づけが多少なりとも達成されていると読者諸賢が判断されるならば、それだけで編者としては本望である。

* * * * *

一八五七年十一月二十二日(日曜日)、ギッシングはイングランド北東部の旧州ヨークシャーにある大聖堂の町、バラ戦争の古戦場として有名なウエイクフィールドで生まれた。ギッシングの父(トマス)は薬剤師として町の中心街ウエストゲイトに自宅兼用の店を構えていた。この父は典型的な下層中産階級の間人で、地方の植物を調査して出版した書物も数点ある、いわゆる教養人であった。自宅には額に入ったディケンズの肖像画があったし、ギッシングが七歳前後の時には、父がディケンズの『互いの友』(二八六四―六五年)の月刊分冊を購入していた。蔵書家の父は教養を志向する点において息子に大きな影響を及ぼしている。ギッシングの教養志向、とりわけ古典学習に対する熱意は、すでに幼年時代に芽生えていた。実家の近くにあった学校でギリシャ語とラテン語の基礎を学び、十歳の頃にはすでにウエルギリウスの作品の一部を翻訳している。ディケンズと奇しくも同じ一八七〇年に、敬愛する父が肺充血で亡くなると、二人の弟と一緒に入学したクエーカー教徒の寄宿学校

で、ギッシングは勉学を続けるための奨学金取得に向けて睡眠を五時間半に定め、食事の時も散歩の時も本を読んでいた。このような猛勉強の結果、彼はマンチェスター大学の前身であるオーエンズ・カレッジで三年間の授業料免除を受け、その秀才ぶりから将来は古典の大学教授になるだろうと思われた。しかし、この若き秀才は街の女を更正させるために更衣室で友だちの金を盗み、退学処分を受け、古典学者への夢を潰されてしまった。

ギッシングは、アメリカでの一年間の逃亡生活から帰国後、この街の女(メアリアン・ヘレン・ハリソン)をロンドンに呼び寄せて結婚し、彼女が売春とアルコール中毒で見ても無残な最期を遂げたあとも、イーディス・アンダーウッドという無教養な女性と結婚した。これらの不幸な結婚は、教養があっても貧乏な男は中産階級の女性と結婚できないというギッシングの悲観的な自己否定の結果であると同時に、性欲を抑制できなかっために女性の教養の欠如を無視せざるを得なかった結果だとも言ってもよい。しかし、精神のおよび肉体的孤独から労働者階級の女性と関係を持つて陥ることになる流離落魄の境遇にもかかわらず、彼の教養に対する深い傾倒は揺らぐことがなかった。彼は無教養な労働者階級の女性を蔑視する一方で、ジョルジュ・サンドやジョージ・エリオットといった知的な女性作家に敬意を払い、ロンドン大学で経済学の学位を取った最初の女性クララ・コレットを自立した「新しい女」として高く評価していた。

従って、彼がイーデイスを見放してフランスの中産階級の女性ガブリエル・フルリとの重婚を決意したのは、肺の病で自分でも残り少ないと感じていた余生を階級的にも知的にも自分と同等の女性と送りたいからであろう。女性に対する蔑視と敬意の共存に端的に示されているように、ギツシングは多くの問題に両価感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していた。

彼の作品が持つ力強さは、まさにこの葛藤の激しさに他ならない。フェミニズムの古典として、つとにその名を知られた『余計者の女たち』（一八九三年）に関しては、ジェンダーの問題へのギツシングの矛盾した感情が、今なお多くのフェミニスト批評家たちによって論じられている。この小説の出版後、「どんな社会平和も女性が男性と同様に知的な訓練を受けないかぎりは成就されない」と言ったギツシングは、ガヴァネスを中心とする「余った女たち」の経済的困窮を背景に、良妻賢母型の「家庭の天使」に代わる「新しい女」のヒロインを描き、教育の機会、職業の選択、財産の相続における男女不平等の実態に読者の目を向け、近代フェミニズム運動の展開に貢献した。ただし、フェミニストとしてのギツシングが共感を示すのは、あくまでも教養としての教育を受けて洗練された感受性を持つ女性たちであった。

ギツシング自身もまた教養、特に古典の教養のために生涯を通して骨身を削っている。大学時代は古典の科目で優秀な成績を収めていたし、ロンドンのスラム街で生活した駆け出しの作

家時代も、独学で古典の学習をしていた。ロンドン上京後の十年に及ぶ貧しい執筆活動のうち、彼が一八八八年に『ネザー・ワールド』の版權料を得て真つ先に訪れたのは古典文学の故郷、イタリアであった。翌年にはギリシャ旅行の夢も実現させている。ギツシングの分身である『埋火』（一八九五年）の主人公、エドマンド・ラングリーは世を捨ててギリシャの古都で静かに四十二歳の冬を過ごしていたとき、「古典の教養などは何ら現世的な効用がない」と言う十八歳の若者に対して、「我々の今の時代ほど世界がギリシャ人たちを必要としたことはない。活力、健全な思考、そして喜び——それが彼らの信条なのだよ」（第四章）と答えている。そうした古典を中心とした教養への傾倒を、ギツシングは様々な登場人物の野心と挫折を通して描いているだけでなく、手紙や日記の中でも頻繁に示している。このラングリーの言葉は、マシュー・アールドが『教養と無秩序』（二八六九年）の中で記した考え、すなわち「教養の機能は特に我々の現代の世界で重要である。現代の文明はすべてギリシャやローマの文明よりもはるかに機械的、外面的であり、ますますそうなる傾向があるからだ。とりわけ我が国では、あらゆる所で文明が最も顕著な形で機械的な性格を帯びる傾向がある。教養は果たすべき重要な役割を担っているのだ」（第一章）という考えを想起させる。科学的に実証可能なものだけを信じる合理主義の思想、例えばダーウィンの進化論によって社会制度としてのキリスト教が弱体化した中期ヴィクトリ

ア朝の終盤に、アーノルドは現実社会に蔓延する美的情操のない中産階級の俗物たちの実利主義と当時の文化的な無秩序を批判した。彼は古典的な教養の精神によって現世における人間完成を追求すべきだと考えていたのである。

こうしたアーノルドの考え、そして同一延長線上にあるラングリーの言葉は、「今の時代ほど世界が教養を必要としたことはない」と言い換えるならば、現代の日本社会においても十分に有効ではないだろうか。少子化に苦しむ現在の日本では、生き残りをかける大学の大半が実社会で役立つ人材の育成に重点を置くあまり、実践能力を身につける専門教育を優先して、幅広い視野と複眼的な思考力や判断力を育成する教養教育をなござりにしている。教養と専門は大学教育という車の両輪であるはずだが、専門教育を偏重する伝統が今も根強く残っている。このように教養が実益に直結しないがゆえに、社会から追放されたような疎外感に悩まされる（教養はあるが金とコネのない）若者が、ギツシングの作品には数多く登場する。その苦悩は下層中産階級の保守的な教養人であったギツシング自身の苦悩である。ギツシングが教育を論じるとき、労働者階級の場合は教育を利用して社会的地位を高めようとする無教養な個人にアイロニーが向けられる。教養小説に見られるような性格・思想の発展や人間的成長など、労働者には期待されていないのだ。一方、中産階級の場合は教養のための教育を実践に役立たないと決めつける社会に批判の矛先が向けられる。教養を身につけた

登場人物たちの多くは、実益中心の社会で、だつが上がらずに敗残者になってしまふ。いずれにせよ、両者の共通点は道德観も倫理観もない実利主義と深く結びついていることである。二十一世紀を迎えた現在、高度に情報化された仮想現実の中にいることが多い私たちの品格——従来は他者との日常的な関係の中で自然に育まれた常識、社会性、倫理性といった人格的価値——が、急激に低下しつつある。そうした人格的価値を取り戻すために必要な力、換言すれば、次々と現れる新しいものに幅の広い視野と高い倫理観で適切に対応し、未知なるものの真実に立ち向かう力こそ、新時代に求められる教養だと言えるだろう。

戦後の急速な工業化と都市化を経てバブル景気を経験した現代の日本人は、産業革命後に飛躍的な経済発展を遂げて大英帝国の威光を浴びながら自己満足に陥っていた、そうしたヴィクトリア朝の人々と同じ轍を踏んでいるように思える。特に一九八五年のプラザ合意を引き金として生じた八〇年代後半から九〇年代初頭にかけてのバブル景気で、日本人はもう欧米に学ぶことは何もないという尊大な態度で「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」と声高に叫び、これが日本経済の実力なのだという東の間の夢に酔いしれたが、「日はまた沈む」の予言どおりにバブル崩壊は平成の大不況を招いてしまった。不況の原因の一つに東アジア諸国（特に中国）の台頭が挙げられるが、同じように独米の工業化によって大不況に陥った後期ヴィクトリア朝

の研究は、日本の現代社会の諸問題を考える上で非常に有益であるはずだ。後期ヴィクトリア朝の諸問題を活写したギッシングの作品を読むことは、バブル絶頂期の一九八九年の『英語青年』四月号に掲載された「ジョージ・ギッシングと十九世紀英国」における小池滋氏の言葉を借りるならば、「百年前のイギリス社会・文明を概観するに留まるわけではなく、現代日本の社会・文明に対する肉迫ともなる」のである。

* * * * *

本書では、「社会」、「時代」、「ジェンダー」、「作家」、「思想」という五つの枠組の中で、それぞれに関連する五つのテーマを章として配置した。

第一部の「社会」では、イギリス人の教育についてのタテ前と本音、失業と遺産相続の角度からの貧困の描写と宗教問題の関係、労働者階級と下層中産階級の登場人物から見た後期ヴィクトリア朝の階級意識、福音主義と弱肉強食の経済政策優先のために民間の善意に委ねられた貧民の救済、都市に対するギッシングの両価感情と決定論的な見解が論考の対象となっている。

第二部の「時代」が分析しているのは、科学に対する希望を時代の風潮として理解した上で意識的に背を向けた作家の錯綜した言説、犯罪人類学のコンテクストに照らした作家の〈正常〉と〈逸脱〉をめぐる言説の揺らぎ、後期ヴィクトリア朝の変貌

する文学市場と出版事情、ギッシングが受けた同時代の文学者や哲学者からの影響、後期ヴィクトリア朝から二十世紀初頭にかけてのイングリッシュネスや南欧世界への傾倒から見たギッシングの文明観と創作活動の不可分性である。

第三部の「ジェンダー」では、因襲から解放された女がオーステインからギッシングに至って「新しい女」として自立する過程、ギッシングが「性的アナキー」の時代と呼んだ後期ヴィクトリア朝のセクシュアリティに関する言説、医学に多大な関心を寄せた当時の人々の身体観、ヴィクトリア朝の結婚制度の弊害による矛盾した女性観、女性の権利の擁護と女嫌いの狭間における当時の男たちの戸惑いと抗いが分析されている。

第四部の「作家」で明らかにされているのは、商業化の時代に個人主義を標榜しつつ空洞化の意識に脅かされ続けた作家の自己、流動性を増したイギリス社会におけるエグザイルたちの疎外感、ギッシングの紀行文に見られる創造的想像力で構築された安住の地としての古典の世界、ギッシングの語りの性質や人物造型の方法に見られる伝統的要素と革新的要素、書く自分と書かれる自分の乖離という後期ヴィクトリア朝の自伝文学に生じた現象である。

第五部の「思想」では、後期ヴィクトリア朝の実証主義や生物学といった科学精神に根ざしたりアリズム・自然主義運動の問題、当時の中心的思潮からの亡命者としてのギッシングと彼のヒューマニズム、社会における芸術や芸術家の存在意義と

美を通じた倫理意識の追求、科学的・実用的・功利的知識によって切り捨てられていった古典主義的精神の必要性が考察されている。本書の掉尾を飾るのはギッシング研究の第一人者、ピエール・ライクロフトの私記』の中で、ギッシングは「科学が大きな戦争の時代をもたらし、それがやがて過去の幾千もの戦闘を顔色なからしめ、そして恐らく人類が苦勞して得た進歩を蹂躪して血みどろな混沌状態にするだろう」（『冬』第十八章）という警告を発している。科学技術文明をもたらした近代人の理性はすべてをコントロールすることができなかった。人類の絶滅に直結する現代の核兵器開発はその反証である。北朝鮮の無思慮な核実験とアメリカ帝国主義の金融制裁の中で日本の姿勢が世界中から注目されている今、平和主義を標榜したギッシングの気質をイギリス帝国主義の歴史に照らして考察した最終章は、本書を出版する最大の意義を高らかに謳っている。

二〇〇七年五月二十三日

編者